

熊本大学医学部附属病院

研修医師 鬼塚 悠里 2013年6月

熊本大学医学部初期臨床研修2年次の鬼塚悠里と申します。

2013年6月、初期臨床研修プログラムの地域医療を、出水総合医療センターで研修させていただきました。この1か月間の研修は本当に充実したものでした。

まず、事前に学びたいことを詳細に聞き取っていただき、希望を汲んだ濃密なスケジュールを組んでいただきました。研修は大きく院内・院外に分かれており、まず院内では診療科として消化器内科・小児科・総合内科の3科をローテートさせていただきました。内視鏡指導、病棟・外来の幅広い研修、診療の合間のレクチャー、と盛りだくさんの内容で、他にも院内の医療安全管理室、地域医療連携室、臨床検査科、リハビリテーション科とあつという間に時間が過ぎていきました。院外では、野田診療所、高尾野診療所、特別養護老人ホーム鶴寿会たかおの、上場診療所、出水保健センターでの健康相談、検診事業といった、地域密着型の医療を体験させていただき、書ききれないほどの多くの経験をする事ができました。

その中でも、地域医療として最も印象に残ったのは往診でした。往診は、各家庭に密着し、柔軟な対応を求められる一方で、限られた医療資源で対応せねばならない特殊な医療行為です。何よりも、その距離の近さからまるで自分の家族を診察しているような不思議な気持ちになり、その重要性や必要性を肌で感じることができました。しかし一方で、患者各々の複雑な事情の下で行われるため、超高齢社会において格差のない医療水準を維持することの難しさ、不安を感じました。このことは大学病院や都市部の病院では実感できず、地域診療に向き合うということは、一番身近に日本の医療制度そのものの課題に触れることだと感じました。

他にも特別養護老人ホームや母子健診で医療制度の仕組みを学び、さらに院内安全対策や、地域医療連携室で地域の病院とのつながりを学ぶことで、「医療全体を客観的に見る目」と、「実際に足を運んで・自分の手を動かして見る目」という、これまでと全く異なる広い視野を持つことができました。それにより医療を単なる「医療行為」ではなく「個人が生まれてから死ぬまでの流れの中で、医療者と家庭と地域が一丸となって支えていくもの」としてとらえることができるようになったと思います。

最後に、この一か月間で一番感動したことは、出水総合医療センターの先生方が、本当に志高く地域診療に当たられていることでした。診療レベルの高さはもちろん、各診療所や開業の先生方と共に、熱い気持ちで地域医療に貢献されていること、そしてそれを支えるコメディカルの方、スタッフの皆様も同じ気持ちで、一丸となって、地域医療が支えられているのだと実感しました。

地域医療の何も分からぬまま、出水に飛び込んできた一か月でしたが、このような素晴らしい研修を受けることができ、感謝の思いでいっぱいです。ご迷惑をおかけしたことも多々あったと思いますが、暖かくご指導いただき、本当にありがとうございました。素晴らしい縁に感謝しつつ、私もいつか地域医療の一端を担う立派な医師となれるよう、残りの研修を頑張りたいと思います。